淡寄延房著

浪華史略

初編

下

A414
2

浪花史畧第一輯巻之二

東京　染崎延房編集

○暴論を説破して市正四將を召しむる事

再説片桐且元い至妙の良策を献ぜとりへども淀君駿府の遠謀ふ惑いされく只管労を厭ふとのを思ひ込れ故ふよう渠ゞ辞を用ひずして依て且元も諫めて甲斐なき支を測り慶長十五年八月よう彼の大佛を造立為さんと且元花洛ふ滞留

48-7637

して諸國の木財を贖ひ或ハ豪富の寄進と
集め堂宇番匠鑄物師の屬ひハ最も名誉るゝもの
を数百人を雇入れて佛像再建ふおよが程ふ且
元智高ゐるのをあらず兼るふ正路実直なるを
夜役所の裡を離れず跡令規則を嚴ふせしかば
工夫とらんども手を抜得ず殊さら豊臣恩顧の諸
侯ハ或ハ木石を寄附するなり或ハ人夫を出し抔
なく助けとある支弗うし故豫て計筭せしに
ハ金銀の費も出ず且成業の進む支最も速うあり
しかば此分ふして運びあべ近きふ落成なるべしと
且元いよく奮發しく諸工を激まけるとあん徒
て次の年弥生ハ天皇既ふ御位を皇太子ふ譲
らせなの是を後水尾天皇と称すとふ依く大
御所ハ御末子右兵衛督義直郷十男常陸介頼宣郷
十一男を相伴ハれく此月初旬ふ上洛あるべ江戸將軍
秀忠公より井伊兵部少輔直政を名代として上京

あるべし此時家康公より西尾豊後守を使節として大坂城へ遣はされたる則ち使者の口上の趣旨天皇御即位ふつゝか御老弾も厭はせられず両公達義直頼宣を伴はれて大御所の上洛あり秀頼公も今年いとや十九才ふ成らせらるゝとゝいまゞ皇都へ一回も列らせられし事もなく依て御即位の拜賀として来る四月十四日参朝あらせ給ふべく事の序ふ二條の城ふも御立寄在らせられるべく久々ふて大御所

ふも御対顔あらせられ御成長の御形容をも見ふひたしとの御変なりと深く感ふ及ぶふぞ淀君御母子ゝ殊ふれしが御身是より御返答致すべき旨挨拶ありて使節を暇しる跡ふて急ぎ老臣等を召寄せて大御所よりの使者の趣き依奈何せんと問はせあるべ奸臣大野父子浅ましや或い渡邊内蔵介荻野道喜と喚る者進ミ出て云へるやう御参内ハ左まれ右まれ二條の城へ君を呼付け出仕をせよと言つぬむるの使者の口上

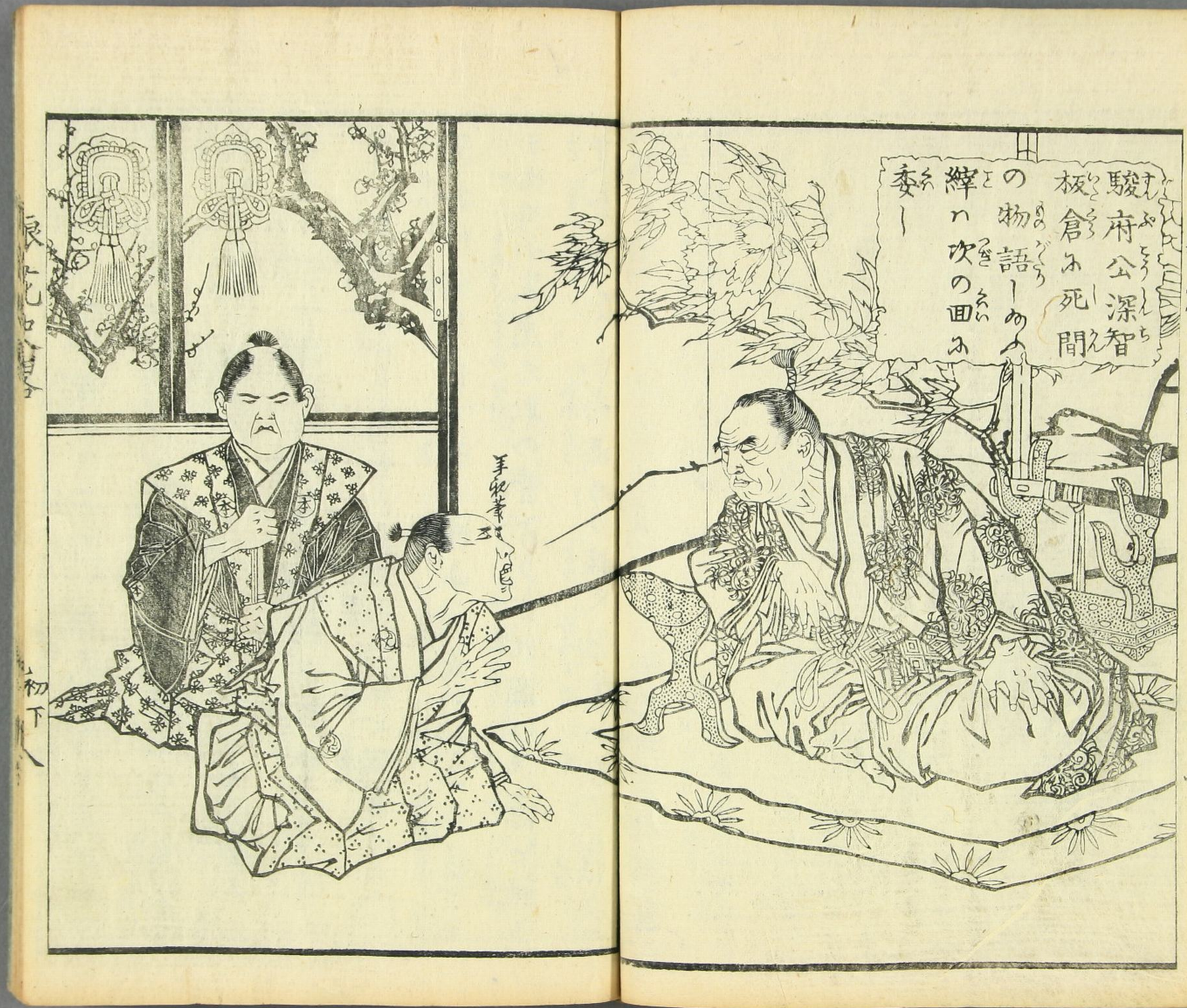
心得ぐさー太閤在世の時ハ五大老の一人ゆく常に
大坂へ勤仕せーヲグ先君の遺詔を背きて若君年
長なくともいまゞ太政を還さんともせず自らら天下
の權を掬りて今大御所と称せらるゝ武威ヲ擅うて
姑め我忘れ彩の如くヲ無禮なる倘是をも忍ぶ
べくんば何をか忍べざるべけん幸ひ家康二條ヲ在れ
ば不意ヲ起つて攻蒐らんヲ老奴グ首を引提んと
何条匹き支あらんと絆もあげある大野治ぐ此評
論ヲ煽動せられ何の思慮あさ壯佼グ大野の決断
最もよ時ハ得ぐさく失ひ易き我至急ヲ京師へ乱
入の御准備あらさ然るべーと云ふヲ淀君憤激せら
れ既ヲ手切もの決評ヲおよびんとせー其折も花
洛ヲ仮りて且元グ大御所よりの使節として西尾豊
刀入来の報き箇相〻と伝人聞き迄ハ易きヲ似
て易カ〻ぬ又大御所の強懇あるべ此挙ヲ至り城
中ヲ暴論なんど起らんヲハ容易ならざる勢ひヲ

立ゑらんも測りがたしと即刻京師を發足して大坂ゑ
到らしゑ果して手切との評決ゑあらんとする所なれば
且元大いゑ驚きて淀殿御母子をたづめて列坐の諸
臣ゑ對ひて云ふやう御坪義の強きと且元昊ゑ兼
ねりしに以の外の次第あり今德川家を討んとする
とも智略ゑ長ける大御所なるべ必勝あるべく思ひ
も寄らぎ愁ひ干戈を動して輩下我強げ奉
らば成き事もあく退くとも朝敵の名い免れ難
く当家の破滅とありぬべし然るぬだゑ大御所ゑいまれ
より事を起しあげ及逆ありと云ふと名うて征伐
為らんの御心ゑ種々雜題を言ひかけて城中の士
ゑ憤懣を起さしめんと計らる我小生豫て察する
故徳川氏よりの命令ゑ忍びがたきも堪忍び怒を
慰して遥ふも何卒当家を泰山の安きゑ置んと思へど
あり然る我疎暴の挙動ゆゑ必ず大御所の術中ゑ
陷ん変疑ひなしと是非を分けて倫ずれども尚淀

君あり御とりの解けざる弟あり兄あるのみぞ大野道犬戦を出で片桐氏の所存あり只こを支城のを計らるゝが奸智の長しる徳川御父子今より百年俟らうとも爭ひ天下の政権を秀頼公に渡さべき所家ぶの長久あらゝば渠ら幕下に属せらるとても和殿い本意とせらるゝやと詰問いわゝ冷笑ひ支等の支み和殿等ら批判を受くべき且元るんや所詮兵威を示さゞわが秀頼公の政権を極りなるみ至らぬ支い強て決心いゝ居るとど家康公い凡智みあらず且人望と得られ一故豊臣恩顧の徒養さん咸新恩を感ぜぬゝ尠し公ば大坂在世のうちい猥りみ兵端を開くがたし彼君今い健うあるとど人壽い限りあるものゝと七旬みゝ人ば公だりの余命い在るまで大御所薨したるひるがば秀忠賢明み在さるとも渠と互角の勢ひを張ば徒奚のうちみ大坂へ心を通いを輩も出来く怖るべきの戦ひるゝば仍て大御所ハ一

世の只穏便と計ることを是万全の策なりと心底無
まぐ申し出べき大弥具屓の淀君も実に理うとや
思へれけん御簾の裡より宣ふやう且元の言ふ如至
極の論ふ所も思ひ出らんが若君ふ冤
ふ角ふ上洛ある筈好をあらず吾儕ふ於ても何と
やら底意の測りをぬ大御所ふ會いぜん夏い心憂し
是等い奈何ふ計ふぞと宣ひて且元首を下げ御
前ふいとも何事の思ひ寄なき様さまで

恢ふまで幸ひ此節加藤をちかめ池田浅野福島の
四将当地ふ滞留在るべ伴の四名を召せられ
意見を向いせるひるがまく良策もいりんと宣ふ
淀君頷きるひて更ふ四将を城中ふ招き且元を坐
ふ列なりて大御所よりの使節の話き遂一ふ演説る
し仍て小生上洛を只管進めまくもとどの若君
らとを好ませるいず最も近年関東の御所置心
得ぐさき廉もあるべ不思議の変の生ぜんと又夫


駿府公深智
板倉ゐ死間
の物語りめの
縛り次の面ゐ
変ー

迚も測らるまず種々の苦念を致すと雖も更の且元
が愚案のなかるべずとまの仍て御母子の尊意を
悩ましめんが故の兄等を召させのひしより遠き小
生が不省を佐けて当家の瑕瑾の相成らざる高論
のとを預りしとまの四将の手を拱きてかの
思按の外なりしが開が中の清正の他の先立て我
を出で小生虎之助の昔より古太閤の洪恩を被る
度蒼海よりも尚深うして依て存寄の在らん限りの
胃衷をそして言上せべし思ふの這回大御所より参
内を勧めらるましん秀頼公の虚弱を察し自然上京
の節の附のいよく比興隋弱の君と京中の風説し
て当家の威光を折くべく偏まと参朝あるの於
ては家康公も右府なるとど先官なりと云ふを以て
君を未坐の居垂きて万座の裾奏の威を示し幕下
の如く知らるんと言ふ策なるん度疑ひなし此両端
の謀畧を此方よりして拵らんの上洛あるの如の色

最も参内い這回ハ限らず大御所帰國ありて後遊
さるとも苦しからず今度ハ豊國大明神へ御参詣
ハ事よせて二條の城へ入らせられ大御所へ御對顔
済まば直さま御駕と回らさも其日のうちハ還御あゝべ
渠が意表ハ出るに以て総ての方畧齟齬ひ自と君の
御器量の露いるハ至るべし先んぜる時ハ人を制せの確言
もいへい四月十四日と候べきふあゝず只今破軍の星を操
るハ三月廿八日い撰るハ勝の吉日あるべ此日御發輿遊
ばさるべし途中い勿論ハ座席迫も清正ハ側ハ附従ひ
守護しまいらせい上い関東のへゝ武士が不意と対
んと計るとも指でもさする支あゝド淀君ハも
安堵ありて疾々御准備然るべしと智なり勇ある
清正が此一言と傍ハうち吟居らし池田輝政覚へ
ず元ハとうち笑て加藤の高論極めて可し小生今
い大御所の婿ハい羅ありなとども奚ぞ豊臣の舊
恩と忘れん清正ハん供せらるとるる輝政もまゝと侶

俱み御奥添を仕らんと言へば浅野福島も齊しく膝を我ませく咱們固より同意なるべ俱み御守衛做んと云みみゼ淀君みい尚悖忒なんど太閤在世の頂よりして荒大名と喚れる件の四将ゲ附従づ心遣ひも在まぢきと逐みい思ひ歪さまて秀頼上洛あるべ紀の旨稍決定み及びーるべ且元い胆裏みて我ゲ密策の行われ綷の茲み至りしるい這回の事件い気をひからじと聊ら愁眉を開きーとぞ

○旧恩を忘ぎーて加藤等孤君み陪従する事

却説まーと大御所みい嚮み使節を遣いせーみ大坂より の返答あるーねゲ豫て彼地み間者を入わく秀頼上洛あるや否やと竊うみ探索せらまーみ其者よりの注進みい来る三月廿八日上洛と支きいまり加藤池田浅野らの面々守護みーー来るの旋きるまべ大御所御機嫌宜しかるーず彼面こい関東より新恩を施き支尚大閤の旧恩み倍せり然る秀頼ゲ守衛ーて上京

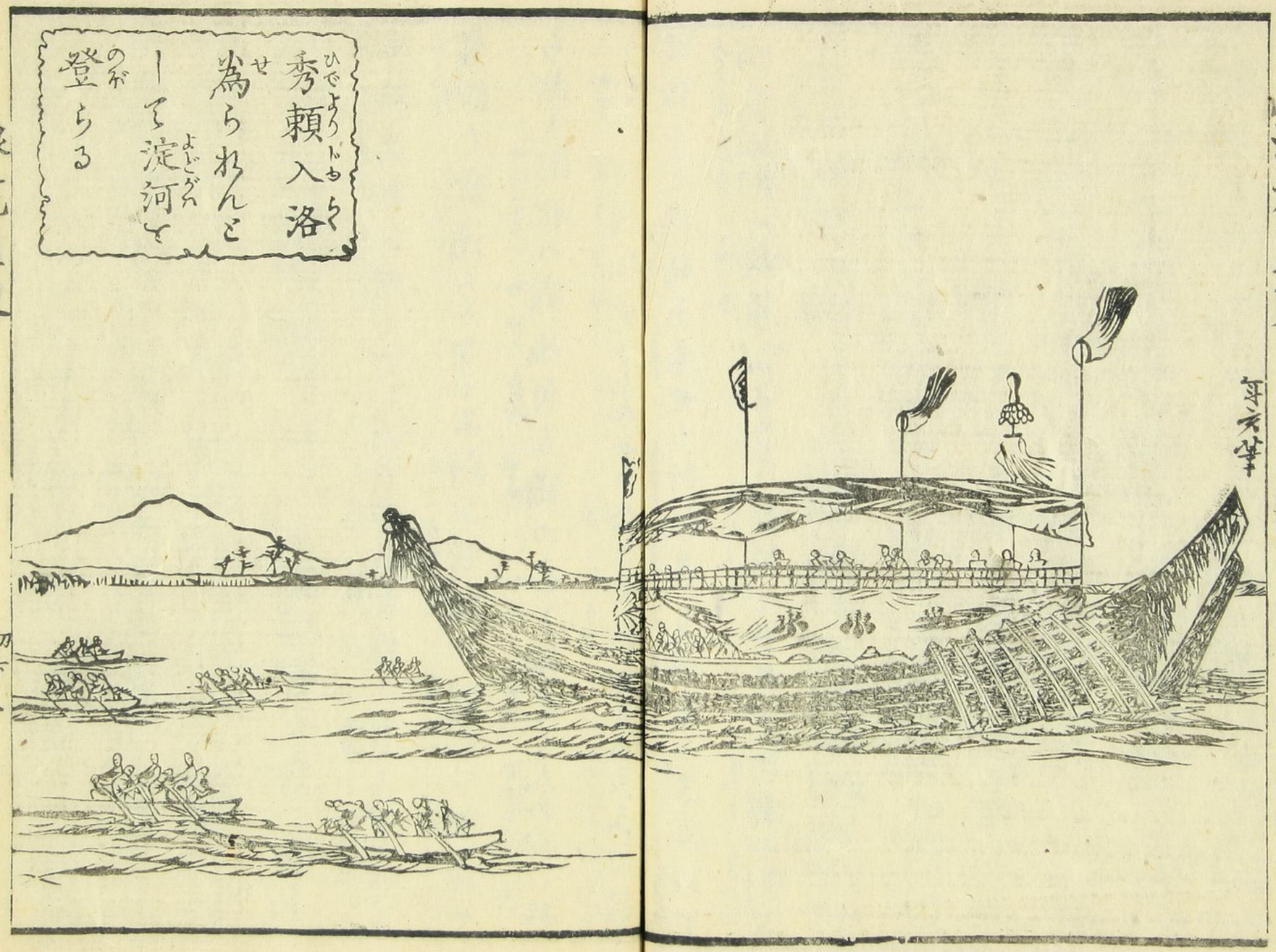
ゐ及ぶる条是偏ゐ且元ゞ智謀ゐ出る所あるゝんゞ劣の如
くゐ彼面々ら秀頼を佐るうちい輙く大坂い潰せまゞと
種々御工夫ゐ及ゞるうちえや日限も近付く程ゐ或
夜京師所司代る板倉伊賀守勝重ゞ父四郎左
工門ある者我偷うゐ召させらるゝゐぞ彼夏やうと出仕
ぜゝゐ御例ゐ扣へゝい本多佐渡守正信のを別ゐ御用
のゆる紛もあく只四方山の話説ゐど是彼とあるうち
ゐ大御所の宣ふゆう其方い年もたや我ゐ齊しく思い
るゝゞ何う老後の望をやあると思ひがけあく問ひ
らゝ四郎左工門謹んゞ不省の体伊賀守い所司代
なるの大任を被り又次男ゝる主膳正い一万石の御
加恩ありて若年寄を相勤むる支家の面目武門の
冥加又此上やゆゞき臣ゞ老後の願ひと言へるい適ま
相応の御用もあるゝゞ死をゆて御恩我報ゞたゝと
思ふの外いいずとゝる我大坂所所のひゝうち笑
て居ゆのを左右の侍按摩もをく是より世事の雑

候みふり又軍法の評論みどうち論らくる支の席
みまくと大佐所の宣ふやう抑兵法み五間あり板倉
和るやと答へあんび四郎左工門手と下げて葺て存ド
申さぎとあん受けみ及ぶみぞ大御所みい笑いせぬ
ひて板倉如きの武夫ど五間を知らざる支やいある夫
五間とい生間死間反間口間郷間見あり開ど中み反
間い将らる者の用ある策みて善く人の知る所なを
ども凡人の臣らて誠忠の至極と言ふい偏み死

間みぬ止まれり然をども用ある者あり其故と奈何と
言ふみ戦いずして人を殺し我もまくとをみ死ー世の
人口と塞ぎて以て天下泰平の功を為を是則ち死
間ある君み殉忠あらん者盈夜心み工夫して行ゐ
いぎんび在るべらずとんひり乱み去ひ棄て寂所み
入らせるふみぞ案下四郎左工門い傍み和へー本妻
み對ひ目今の御意の叛き咱们ど狗み徹せど生
得魯鈍ある故み子解せざる所あり和殿い才智凡

ゐるねが推察せられ一所あるん頼ふに示教ゐ預
りうとと向ひうけらまて佐渡守い須臾思按の紛
ゐりしゞ我ゞ輩の今際ゐ君の深恵いゐるくゐ
窺ひゐるべくもうもゐるねど佐渡ゞ推量せる所
い是ゐやうくんと言ひつもも扇を以て毫の上ゐ加
ちうゐざら一どゐん為池田等四五人の名前を書てえするゐぞ四郎
ざえん左工門様をを主ち貴所の明察寔ゐ然う今ぞ
左工門びん敬ゐゞ老後の望を達する時節ゐもうと愉快
の色を露いせゞ本多い尚もさ一寄つて和殿の命い國
うらづえちうん家の礎是忠臣の亀鑑なりうゐ迫もあゐ支なゞう
ゐう完賢こ他へ泄らさまゐとゐゐ板倉頷きて倶ゐ退
しゅつ出為ゐうける今稍ゐ大坂ゐてい准備万般整ひ一かゞ
きく来る廿八日ゐ上京あるべく旅き筏二條の協へ申し入
れらを恁く廿七日より供方の面々ゐい総て大坂の城
へ集ゐり其夜丑の上刻ゐ右大臣秀頼公ゐい城中を
進発せゐれく伏見迫い船路あり是ゐ伝く淀牧方

等総て陸路の警衛い清正が手勢を以て厳重ふ
固めに或い弓組鉄炮組ふど一隊〻の物頭が
おの〻組子を率へて西岸の堤を歩して御座紙
とゝめん守護ゐせり左右まるうち伏見刑部
秀頼是より乗輿しゐの前駈い江及の押領使
佐〻木入道女入うり此勢凡百五十人次ふ当家
の旗奉行郡主馬之亮を先として弓長柄鉄砲等
陸續として隊伍を乱さず引続いて徒士二百人何も
緋緞子の陣羽織を着せし行粧最も清らかあり此日
福島正則い病氣ふよりて陪従せざれど御輿の側ふ
い日本無双と喚ばるる加藤清正池田輝政浅野幸
長庁桐且元の四名何れも厳斗目麻上下の股立を
高く取上げ切袴の草鞋を履ちあり其他木村長門
守大野主馬等を始めとして猛弾の壮士三十人ばる同様
の歩拵ふて輿の左右を警衛せり後従い七手の番頭
一隊〻ふ備へを立て大いふ武威を輝らしぬ総て這回


秀頼入洛
為られんと
して淀河を
登らる

の上洛いそぐめての支あるべき善美を尽さぬ支もなくぬか
豫更清正以下の三将歩行股立ゐて供せらるる支よりや
大御所あるべとて斯る支ゐに至るまでなり是偏へに古
太閤の旧恩深き故あらんと云る者感賞あるのみならず
秀頼虚弱ゐ渡らせ給へど常ゐ奥殿ゐ育ちなひて
容貌も最清らなるゐ躬ゐ冠服を装ひて来臨せ
られ形状い威権自と備いまる様見て人の心い移
り安く太閤在世ならんゐ余とも歓びゐ有ゐど請
ゐ涙を催すゆあり思慮浅き雑人ども多い有る君を傾けん
と関東ゐてせらるるも加藤ゐ如き英勇ゐ草鞋でた
供をする勢ひていあらく及ぶ支あるまじと種々評判を
做せりとそ介がまく大御所ゐ秀頼伏見ゐ着船と
聞うと義直頼宣両公達を御迎ひして遣いされゐ
途中ゐ於て行逢れらり是ゐ依て両公達ゐ急ぎ駕
より立出て平砂の上ゐ和へらる夫と云るより秀頼ゐ
も下乗せられんと為るに清正禁めて言るやう

君に従一位右大臣たり奚ぞ下乗に及ばざるべき乗輿
の侍ふ御按摩遊びさせらるる苦しゝかゝずと大音声
に喚るゝぞ秀頼公に其侍ふ両公達に御會釈あ
り斯て二條に列らせる人々家康公も衣冠を正され
端近く迎出迎いをする時清正思ふやう君も右府
に在せど親父に先官なるのみならず別て孫婿なりと
見下し未坐に居んに必定なり偖其時に太閤の御
遺諚を言ひ出し君臣の義を押立て渠と未坐に
引ゐるゝ孫て虚弱と侮りて関東方へ媚諂ふ諸大名
ら皆ふ泡吹せんと八方に目を配りて竝居る諸侯に一
礼ふ秀頼公に附従へば輝政幸長且元等も倶に
心を配りて君の左右を守護して奥の一間へ徐々と
うち通り行く形勢に四辺を拂ふばかりなり然れど
も大御所の威を震ひて氣色なく秀頼公の御
手を取りて上段の間に伴ひ清正は二条に対り
も下りて双手を膝に下させらるる君に久々御意得ざ

うしゐ先以て健ゝゐ御成長在らせられ俺們ゐおゐても
満足せうと一礼を做しのゐゐぞ清正歩しく心と安んじ
我が君ゐの所若年殿府公ゐのおん歳といひ殊ゐい男
君あるべ所對座ありて然るべしと言上ゐ及ぶ程ゐ秀
頼も坐を避さく所挨拶を演らるれど大御所い尚席
を動ろぎ清正ゐ射いせらるを以後い冤もあを今日ゝ
珍客への所純走あるべ我への斟酌無用ゐ夫ゐ
就て加藤をぞ遠路の陪従苦労ゐと
そと懇ろゐ何ども辞を賜ひて是より饗応ゐ及ぶ
ゐも渠等ゞ心を安んぜんと男子い一個も席ゐ入を
ず阿茶の局と頭として配膳いる女中ゐり殊ゐい
大政所古太閤の簾中ゐ三條御幸町の邸ゐあり ゐも当席ゐ招うせられて
俱ゐ酒宴ゐ及ぶを清正以下の四人も同席ゐ入
らるて大御所自ゝ相伴なり然れども且元い尚惘
惑る所あるべ我を出ゝ云へるやう秀頼公ゐい御幼
少より附随ゐ申らせて平常の御食事とも且元

お給仕奉るべ今日の義も同様お御免を蒙り申
すべーとく君の側お坐をあつて酒食を少しもま
わらせず大御所あるを桐が誠忠ある殘感ども
市正苦しかるず給仕ハ隨意なるべが右府秀頼へ
備る猪部お於て毛頭疎畧の品を差めす若年の
秀頼お食味を以て怪我あらせてハ末代迄も家康
が悪名道をかとけもで不実の挙動掌てあ各
隅意あるべうずと所放寛ダもー風情おて秀
頼公の器の魚菜を狩をて食ーー杯ーおんべ何もも勘ーく
安堵ーて駆て酒食も終るーのが先づ御休息あるべ
とく大御所ハ退坐あり大政所ハ秀頼おうち對ハ
れて分くるとも物語りせらるるうち清正等四人おも
別席を賜りて休息お及ぶべ旨最懇ろお命じ
らるを遵がに固辞する支を得ぎ木村以下の面々
を次お盃く獲らーお一間隔てー別席へ四人
濟ーく趣ならう介べまと板倉四郎左工門おハ曩

に大内所の御前にて死間の活物語りあり旦佐渡守
正信より助言せられ所もあり公らぬざに板倉内加
藤池田等甲乙が秀頼公を守護して上洛あるの強き
を傳へ聞る時すりして新なる名誉の面々心と一致
せるに於ての大坂の武威輝きく関東のあん為に
是猖んの病ひあらと豫く苦慮せし折ふるまひ
是ぞ忠義の為納めと万般工夫を回らせしに暗に
害のるものの防ぎ亘きの古語もあるとび妻殺せる
の外あるべき尤も計畧圖に中るとも即坐に死するに
至りて密謀忽地露顕して君の御名を汚すに及
び月日経るに従ひて其妻自然と的中にすやう
調劑せずんば在るべうずと偷うに班猫の妻を求
めてまをを饅頭の餡に加味し数五ツをば准備し
て紙白木の折の裡にあさめ赤茶一器を持副て二
條の城に赴きて差紙折もぐると窺ふ所に今清正
等四人の面々別室にて休息あせば是幸ひと

我を入り今日の疲を紛労ひ杯一つ更めまと言へるゆう
幹伊賀守殿へ当時所司代なるゆゑ御馳走あさ
で悔へさる当職の者ゆまども折々公務世話しを
して公等ゆ見申る度をさへ得ぜ然るゆ目今禁中
より御著下のゆ残らとて是る品を頂戴為されば
這へまと得ぐさき幸ひ故ゆ家一つまつ〳〵せんと隠居役
相応ゆことを迫伺公いろ〳〵たりゆ茶も調進致もべけ
れど先づ賞翫下さるべしとて折の裡なる饅頭を

一ッづ取り分けく加藤以下みことを差め残る一ッを
我ゲ前ゆ置けば清正自餘の面々も豫て懇意の板
倉あまど斯る時ゆ名由断せば奈けるゆ音一礼せ
るのを熊と除談ゆ及ぶみぞ板倉も又落付顔ゆ
程よくあまゆ回答を為ゆ〳〵賑て一服の茶を點て先づ
自己ゲ飲試を別ゆ一服點る我四人ゆ前ゆ差出し
茶の湯加減も宜しけまば卒召まよと差むまば且元
いさりげく彼饅頭をおし頂き斯る御縁ゆ觸まぞ

んば御箸下の活菓子とゞ頂戴まる支慥ふべき幸ひふ生八旬ゐ餘れる母のゆんゞ渠ゐ頂戴致さんべしと夫とゐあゝゐ加藤等ゐ心付せゝ饅頭を懐中ゐさんとまる旅ゐ板倉い是を見て南無三渠ゐ持飯らをてゐ死ん間の密計あゝざるのをゝ世の嘲りを免れずと心を痛むる一世の浮沈效ゐ為うて板倉ゲ奈何ある智辯を揮るあらん并い次の編を見て知るべし

浪花史畧第一輯巻之二 終

漢語消息往来 中形 全一冊

漢語圖解 中形 全三冊

深澤菱潭筆
習字漢語篇 半紙本 全一冊

安齋美雄著
音訓開化名頭 半紙本 全一冊

横須賀安枝著
輿地暗射圖手鑑 横本 全二冊

朝鮮國細見全圖　半紙形　全一折

朝鮮事情（梁崎延房著）　半紙本　全二冊

説教心得草（瓜生政和著）　中形　全六冊

浪花史畧（梁寄延房著）　中形　初編より五編迄

東京書肆

須原屋茂兵衛　山城屋佐兵衛　小林新七　岡田屋嘉兵衛　和泉屋市兵衛　和泉屋金右衛門　須原屋伊八　和泉屋庄次郎　藤岡屋慶治郎　森屋治兵衛　山口屋藤兵衛　鶴屋喜右衛門　丁子屋喜兵衛　丁子屋平兵衛　丁子屋善五郎　丁子屋忠七　堂

010190509260

1